

ダマスクス遠望

信州イスラーム世界勉強会

2025年5月24日

若林 啓史



マックス・シュミット《ダマスクス》 1844年

紙本水彩 27.5 x 43.5 cm

Max Schmidt (1818-1901), Damascus, 1844

Exhibited: The Fine Art Society, Great Cities in the 19th Century, London, 1985

Sale: Christie's, London, 4 May 1995; Sotheby's, London, 24 November 2009

はじめに

「歴史的シリア」とは、第一次世界大戦後、シリア、レバノン、トランスヨルダン、パレスティナに四分割された地域であり、オスマン帝国解体まで、一体の領域として認識されていた。歴史的シリアは、古代オリエント時代より、周辺の強国の争奪の対象となった。特にその中心ダマスクスは、地中海世界と東方世界を結ぶ隊商路の要衝であった。ローマ帝国のユリアノス帝（在位361-363）は、ダマスクスを喩えて「東方全州の眼」（ὁ τῆς ἑώας ἀπάσης ὀφθαλμός）と言った。

西暦7世紀、カリフの軍団は歴史的シリアを征服した。イスラーム世界最初の王朝であるウマイヤ朝は、ダマスクスを都とした。アラビア半島から興ったイスラーム帝国が、北アフリカから中央アジアに及ぶ版図を統治する上で、ダマスクスは最も重要な都市であった。

今回はダマスクスの地誌と歴史を概観し、この地を舞台に栄えた都市文明が、世界の人びとに与えた影響は何か、「ダマスクス」の名を冠するいくつかの文物を例に考えてみたい。



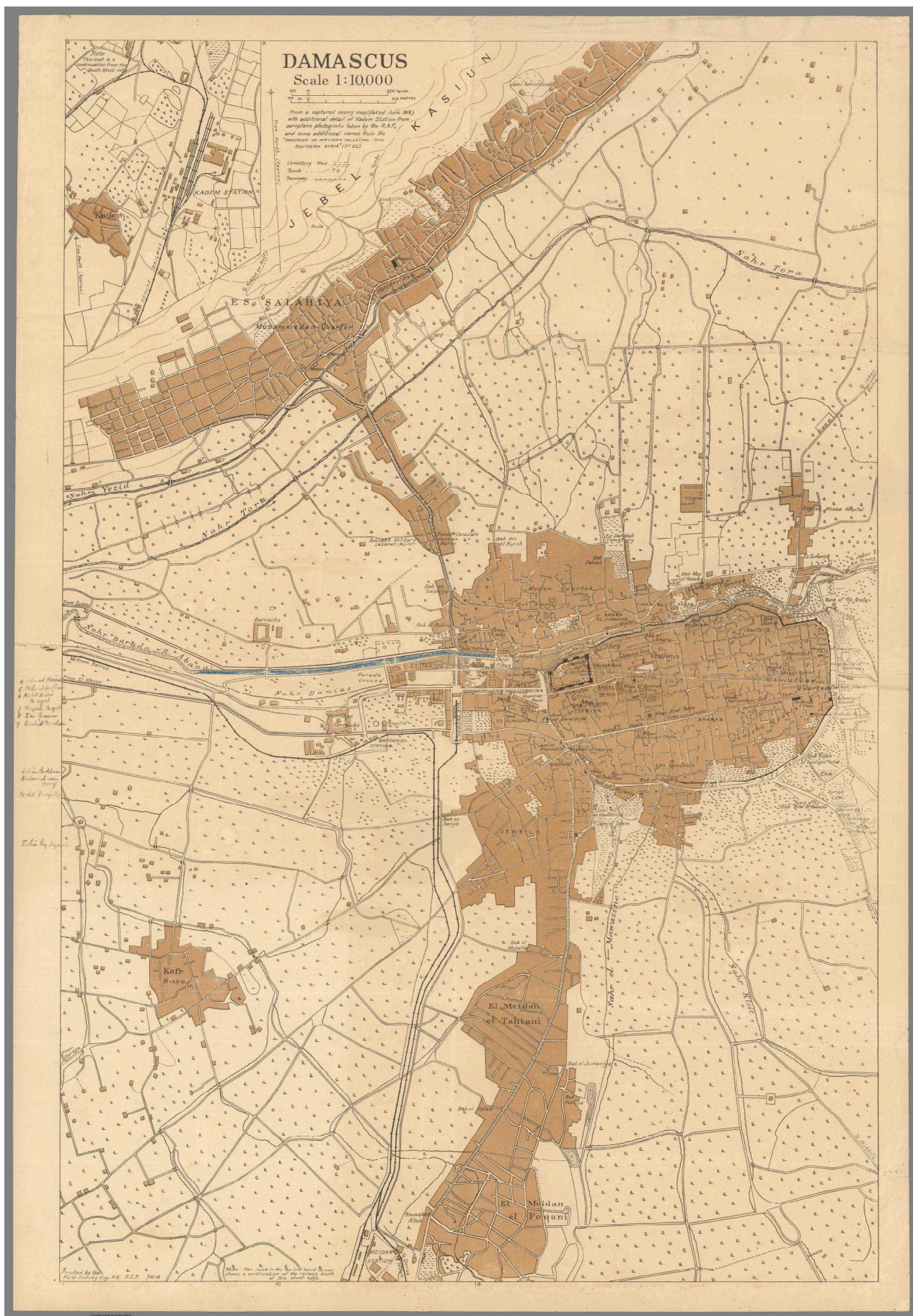
写真　ダマスクス郊外　2011年4月11日撮影

ダマスクスの景観は、「カシオン山・バラダ川・ゲータ緑地」の三名勝によって特徴づけられると、多くの人びとが讃えてきた。しかし近年、これらは乱開発により急速に相貌を変えつつある。ダマスクス市街地の東に、バラダ川の支流トゥーラー川が潤す「アブー・ジャラシ農園」がある。農園を中心とする359ヘクタールは1975年、「東公園」用地として買収されたが、計画は迷走している。そのためアブー・ジャラシ農園は、ダマスクスの面影を留める貴重な一角となった。しかしここにも、2020年に変電所が建設されるなど、開発が及んでいる

ダマスクスの地誌

ダマスクス（Dimashq）はシリアの内陸部、標高700mに位置し、人が住み続けている最古の都市の一つである。アンチ・レバノン山脈の水源がバラダ川など七つの流れに分かれ、豊かなゲータ緑地を生み出す場所に、最初の定住地が築かれた。シリアの内陸では、都市が乾燥した大地の中で島のように点在し、他の都市とは隊商路で結ばれていた。都市は防御のための城壁で囲まれており、その周囲に農村地帯を擁していた。

ダマスクスの最も古い街区は、東西長径約1.6km、南北短径約1kmの楕円形の城壁に囲まれている。城壁から南へ、ミーダーン街区がメッカへの巡礼路に沿っている。城壁からバラダ川を挟んで北側には、マムルーク朝以後に広がったスーク・サールージャ街区がある。カシオン山の麓には、サーリヒーヤ街区が延びている。十字軍によるエルサレム占領（1099年）から避難した地中海沿岸の住民が、この街区の原型を築いた。サーリヒーヤ街区にある神秘思想家イブン・アルアラビー（1165-1240）の墓廟は、オスマン帝国の手厚い保護を受けた。



陸地測量隊「ダマスカス」

Field Survey Company, 7 October 1918. Map of Damascus
Scale 1/10,000. From a captured enemy map (dated June 1918)

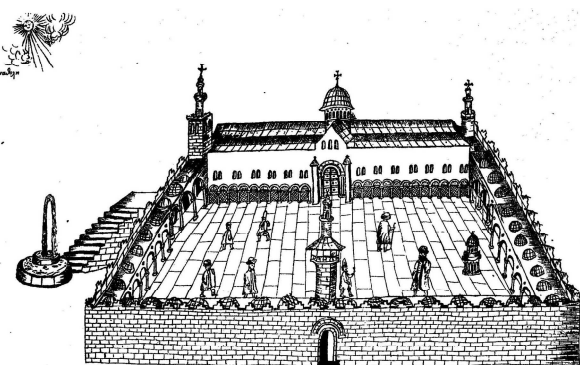
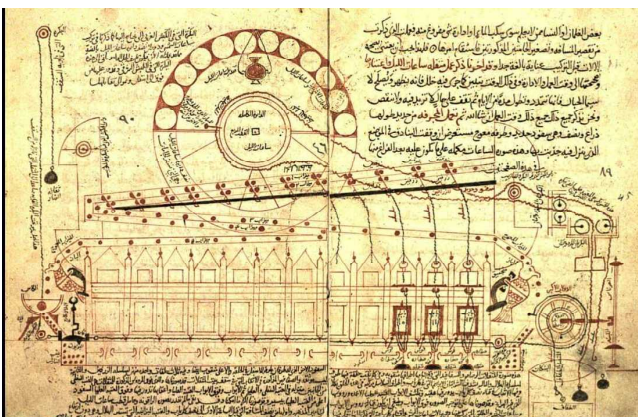


写真 ウマイヤ・モスク

ダマスカスを象徴するウマイヤ・モスクは、鉄器時代には既に祭祀の場所であった。ローマ帝国時代、ゼウスの神殿となり、現在も神殿の石材が一部用いられている。ローマ帝国がキリスト教を受容すると、神殿はキリスト教の大聖堂になった。ウマイヤ朝イスラーム帝国の時代、大聖堂はモスクに転用された。モスクは、大聖堂の基本的な構造を受け継いでいる

政治の中核

紀元前1350年頃には、古代オリエン特世界でダマスカスは知られていた。ウマイヤ朝イスラーム帝国の時代、ダマスカスは帝国の首都となった。ウマイヤ朝の「緑の宮殿」の場所に、マムルーク朝の「金の宮殿」が建てられ、18世紀、オスマン帝国の総督を務めたアズム家がそこに居館を築いたと伝えられる。オスマン帝国時代まで、ダマスカスはシリア地方の主要都市の座を維持し、シリア共和国成立後は、その首都として現在に至っている。



Мечеть Омйадовъ въ Дамаскѣ.

左図：リドフーン・アッサーアティー『時計の知識とその使用法』（1203年）。彼の父「時計師ムハンマド」が、ウマイヤ・モスク東門の上に設置したカラクリ水時計の図面

右図：1734年、ウマイヤ・モスクと噴水を訪れたウクライナ人修道士ヴァスィリー・グリゴローヴィッチ=バルスキー（1701-1747）のスケッチ。噴水（ナーフーラ）は、土地の高低差を利用していた。水は20世紀後半涸れたが、地名「ノーファラ」の語源として伝わる。



写真 アラファート山に到着したダマスクスの巡礼団 1907年頃撮影
 デリーの写真師 H. A. Mirza & Sons によるメッカおよびメディーナを記録した作品の一枚。
 中央は、「マフマル」と呼ばれる、巡礼団の中心となるお神輿である。「ハッジ」（大巡礼）
 初日にあたる巡礼月8日、巡礼者はメッカからミナーの谷に移動し、天幕に入って礼拝を行う。
 翌日の夜明けとともに、巡礼者はメッカから21kmにあるアラファートの谷へ移動する。その
 日の正午、全ての巡礼者はアラファートの谷で礼拝を行う

諸宗教の諧調

ダマスクスは、『創世記』など、ユダヤ教聖典に登場する。ダマスクスの城壁内には、古代に遡るユダヤ教徒街区がある。20世紀初頭、1万人を超えていたダマスクスのユダヤ教徒人口は、イスラエル建国後減少、1990年代には約4000人になった。さらに1992年、シリア政府がユダヤ教徒の出国を許可すると、ダマスクスのユダヤ教徒は約10人に減ってしまった。

ダマスクスは、『使徒行伝』のパウロ回心物語や「真っ直ぐな道」の記述など、キリスト教においても重要な場所である。シリアにおけるキリスト教の中心は、アンティオキアであったが、この都市の衰退に伴い、各宗派の「アンティオキア総主教座」はダマスクスに遷った。

635年、イスラーム軍はダマスクスを占領した。イスラームの教義では、ユダヤ教やキリスト教は唯一神を崇拝し、それぞれ聖典を与えられた「啓典の民」とされる。イスラーム支配下に入った「啓典の民」は、貢納などの条件で信仰の保持を認められた。そのため、ダマスクスには三大一神教の宗教施設が共存、各宗派共同体によって維持されている。



写真左：ダマスクス「カナワート駅」（通称・ヒジャーズ駅）1908年開業・駅舎1913年竣工
 写真右：ヒジャーズ鉄道に乗る中央アジアの巡礼者 1909年頃撮影

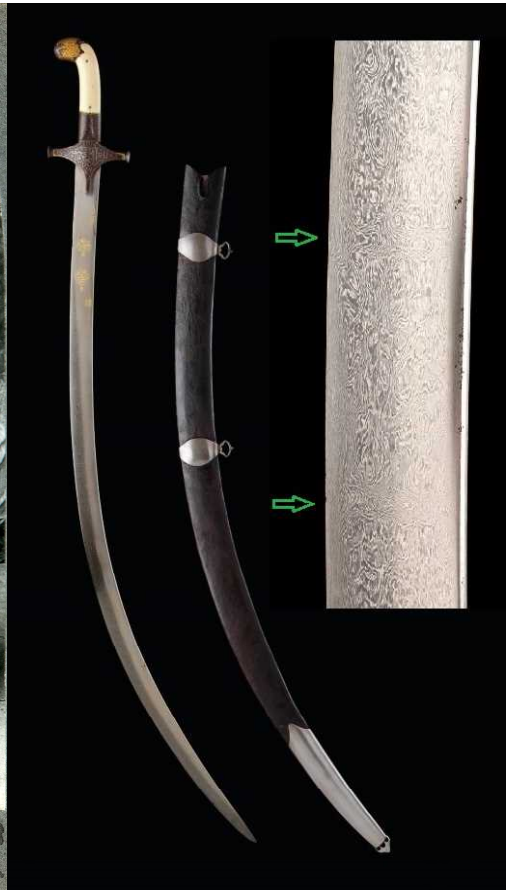
現代史の奔流

イスラームの「五行」の一つである巡礼には、メッカを目指すいくつかのルートがあり、ダマスクスを起点とするルートは、ウマイヤ朝時代に遡る。16世紀、オスマン帝国がシリアを征服すると、ダマスクスにはスライマーン修道場など、巡礼者のための施設が建設され、巡礼路が整備された。1870年代、ダマスクスで編成された巡礼団は、8500人規模と伝わる。

ダマスクスからメディーナまで、1300kmの巡礼路を結ぶヒジャーズ鉄道は、1908年に開通した。この距離を、4日間で走破した記録がある。ヒジャーズ鉄道は、オスマン帝国の国内資本を動員し、スルターン・アブデュルハミド2世が世界のムスリムに喜捨を呼び掛け、外国資本なしに建設した。

ダマスクスには、ヒジャーズ鉄道起点の「カナワート駅」以外に、「バイルート・ダマスクス鉄道」の終着駅として1894年に開業した「ミーダーン駅」と、その翌年に開業した「バラームケ駅」があった。バイルート・ダマスクス鉄道は、南の延伸路線（ホーラーン鉄道）と共に、フランス資本により作られた。フランスは当時、シリアの生糸の約9割を買い付けていた。ヒジャーズ鉄道の次の駅は、ダマスクス市街の南端にある「カダム駅」で、ミーダーン駅と並んでいた。駅名は、預言者ムハンマドの「カダム」（足形）が残る石が由来である。

アブデュルハミド2世の治世は、オスマン帝国の近代化改革が結実に向かった時代であった。しかし、青年トルコ運動の主力を担った「統一進歩委員会」の将校は1908年、クーデターを起こし、アブデュルハミド2世は、翌年退位させられた。さらに1913年のクーデターで「三頭政治」が始まり、指導者の一人ジェマル・パシャは、オスマン帝国が第一次世界大戦に参戦すると、第四軍司令官としてダマスクスに赴任した。「トルコ・ナショナリズム」を新たな理念に掲げる「三頭政治」は、アラブの民族主義者を敵視した。ジェマル・パシャは、ダマスクスの有力者多数を処刑した。1918年10月1日、イギリスなど連合国軍はダマスクスを占領、ほぼ400年にわたったオスマン帝国の支配は終わった。10月7日、ハーシム家のファイサルはダマスクスでシリアの独立政府樹立を宣言したが、シリアは英仏の密約に従って分割された。



写真左：ダマスクスの刀匠

1900年頃撮影

写真右：18世紀の刀工ムハンマド・カーズィム・シーラーズィーの刀と「ムハンマドの梯子」模様

ダマスクスの誉れ

十字軍時代、欧州の王侯はイスラーム世界の刀剣に魅了され、「ダマスクス剣」ないしは素材に着目し「ダマスクス鋼」の伝説を生んだ。「ダマスクス」の名は、欧州人が優れたイスラームの刀剣を、ダマスクスで生産されたと考えたことに由来する。

9世紀の碩学キンディーは、『剣とその種類』の中で、ダマスクスを古くからの刀剣の産地と記している。ダマスクスにはオスマン帝国末期まで、刀工の姿はあった。しかし、ダマスクスは主要な刀剣産地の役割を早く譲ったらしく、むしろ、刀剣武具の集散地の機能を果たしていたと推測されている。代わりに刀剣生産の中心を担ったのは、ペルシア帝国であった。「ダマスクス剣」として現存している刀剣の多くは、ペルシア産であった。

ダマスクス剣は、刀身全体に細かい杓目か、水面のゆらぎのようなマーブル模様を帯びている。この文様は、ダマスクス鋼という特殊な素材でなければ現れないのである。特に最上級作の証明とされる「ムハンマドの梯子」は、刀身を横断する等間隔の帯となって浮かび上がる。現在、マーブル模様の鋼によるナイフや包丁が市販されている。それらは炭素含有量の異なる2種類の鋼から作られた「積層鋼」であり、本来のダマスクス鋼とは別物である。

ダマスクス剣の美点を知った欧州人は、刀剣の実物を熱望し、次に製法を復元して我が物にしようと試みた。しかし、製法解明は難題であった。18世紀半ばには、ダマスクス剣の製作技術は、杜絶していたのである。マイケル・ファラデーら錚々たる科学者がダマスクス鋼の神秘に取り組んだが、今日に至るまで、その強靱性と美しい文様の謎は未解明である。



写真左：西暦8～9世紀のシリアで製作と推定される金糸入り絹織物「受胎告知図」

写真右：エリザベス王女（後の国王）の婚礼衣装 1947年11月20日撮影（余白に自筆署名）

高級織物の代名詞

養蚕技術は古代中国で開発され、絹製品はシルクロードを経て、ローマ帝国にもたらされた。しかし、中国諸王朝は養蚕技術を厳重に管理し、ペルシア帝国は絹製品の中継貿易を独占していた。東ローマ帝国のユスティニアノス大帝（在位527-565）は、敵対するササン朝ペルシア帝国から、絹を買わずにすむ方法を考えていた。同時代の歴史家プロコピオスによれば、皇帝はインドの北に長年住んだことのある修道士たちを引見し、絹は蚕から得られるとの説明を聞き、褒美を約束して蚕の卵を持ち帰るよう命じた。修道士たちは、蚕の卵を持ち出すことに成功、東ローマ帝国で養蚕が始まった。プロコピオスはまた、絹織物は古来ペイルートやスールで製作されていたと記録している。

ウマイヤ朝を開いたムアーウィヤは、奢侈に慣れたダマスクスの民を前に、東ローマ帝国の支配者に見劣りしない装束を用いた。ムアーウィヤは665年、ダマスクスの宮殿に絹織物工房を開いた。桑の生育に適したシリアは、養蚕の中心地に成長した。金糸・銀糸を織り込んだ絹織物は、十字軍により欧州にもたらされ、13世紀以降、「ダマスク織」の名で知られた。欧州では亜麻などによる模倣品も織られ、「ダマスク織」の意味が拡張した。今ではシリアでも、「ダマスク織」はカーテンや家具の材料にする人造繊維を機械で織った布を指すようになり、高級織物の範疇から外れてしまった。

「ブロカール織」（ブローケード）は、11世紀シリアで綿織物として始まり、次第に絹織物に変化した結果、本来の「ダマスク織」に相当する薄手の錦として伝承されている。元々はキリスト教徒が中心となり、家庭で生産していた。19世紀後半にはキリスト教徒の織元が、クルド人織工を組織するようになった。ダマスクスでは1910年、「ブロカール織」の自動織機が導入され、1926年以降、化学染料が一般化した。しかし手織り「ブロカール織」の名声に変化はなく、エリザベス王女の婚礼衣装の布地は、ダマスクスのクルド人織工が製作した。



写真左：「ダマスク・ローズ」（*Rosa × Damascena*）

写真右：ダマスクス・タイル（16世紀後半）ロックウッド・ド・フォレスト2世（1850-1932）旧蔵

香油から建築装飾まで

ダマスクスの名を冠して世界に知られるダマスク・ローズは、東地中海地方のバラ原種が交配した、強い芳香で知られる品種で、古代より栽培されている。ダマスクス東方約60kmのムラーフ村では、ダマスク・ローズの栽培とバラ香油・バラ水の伝統的製法が受け継がれ、2019年、ユネスコ無形文化遺産に登録された。

キンディーは、『香料入門』でバラ水の蒸留法を紹介している。蒸留器具はギリシア語起源のアラビア語で「アンビーク」といい、さらにポルトガル語を経て日本に入り、「ランビキ」と呼ばれた。蒸留により得られる純粋なバラ香油を英語で「オットー」というのは、アラビア語「イトウル」（香料）が語源である。純粋な香油は、蒸留されたバラ水の0.1%以下に過ぎない。香油1kgを得るには4トン、すなわち約2ヘクタールのバラ園で開花した160万輪のバラが必要である。現在ダマスク・ローズは、中国、イラン、ブルガリアなどで栽培されている。

「ダマスクス・タイル」は、建築装飾用に焼かれたイスラーム・タイルの一種である。1514年、オスマン帝国のスルターン・セリム1世は、サファヴィー朝ペルシア帝国の首都タブリーズに攻め入った。この時、ペルシアの優れたタイル職人がオスマン帝国に移住した。その後セリム1世は、マムルーク朝を滅ぼしてエルサレムを支配下に収め、「岩のドーム」を改修した。外壁タイルは、タブリーズから来た工人たちが担当したという。ペルシアのタイル職人たちは、岩のドーム改修が終了すると、ダマスクスに移った。スレイマーン修道場（1554年）を嚆矢として、ダマスクスにおけるオスマン帝国の建築事業に従事、現地の人びとに技術を伝承したとされる。16世紀後半から17世紀にかけてが、ダマスクス・タイルの全盛である。オスマン帝国の繁栄に伴い、ダマスクスにも新たな建築物が加わった。装飾タイルは、建物の外壁のみならず内装にも多用された。ダマスクス独特の色遣いや意匠が発達し、他の地域のタイルと対照可能な、「ダマスクス・タイル」が生まれた。

18世紀には、ダマスクスのタイル生産は斜陽化した。19世紀、欧米からの旅行者がダマスクス・タイルの魅力を発見、優れたタイルは建物から剥がされ、売却された。ロックウッド・ド・フォレスト2世が1876年、ダマスクスで蒐集したタイルに描かれた花は、ダマスク・ローズであろう。花卉や葉の形状、特に、つぼみを包む萼の先端が長く伸びる特徴が明確である。